

嘘から出た本物

巳影樹生

僕には憧れの先輩が居る。

彼女は美しく、聡明で、静かに一人、窓辺に居た。

ただそこに居るだけで美しい、誰からも慕われる、その在り方は僕の理想だった。

そんな先輩を、僕はただ、見つめていただけだった。

ある夜、帰宅する途中、人が行き交うスクランブル交差点で、先輩を視界の端で捉えた。

その姿を捉えようと目を向けると、そこに先輩の姿は無かった。

突然、霧が晴れるように消えた先輩を追ってその場に立つと、世界は一変した。

現実のようで、違う場所。

光は無く、暗闇ではない。灰色な、夢の中のような世界。

人の形をした影が歩き回り、物は人体のパッチワークで出来ていた。

アスファルトは黒い泥のように足を捕らえ、白線は骨が敷き詰められている。

街灯だと思い見上げると、眼球が明かりを灯していて、信号機のように長い腕から生えた二つの手の平が赤く青く点滅していた。

招き寄る人の手、空飛ぶ眼球、歩く鼻、這い廻る舌、ひらひら踊る耳、転げ廻る脚。

辺りには、異様な化物が漂っている。

人体を模したガラス細工のランプのように、光りを放つグロテスクな物体に彩られた世界の中

。

息を呑み、改めて辺りを見渡すと、人のような影から何かが出てきた。

宙に浮かぶ眼球、眼球は僕に向けて、ゆらゆらと漂ってくる。

その目玉を避けると、笑い声がした。振り向くと、白い歯を見せた口が飛んできて、僕に噛みついた。

食いついた口を外そうと掴んでも、口は歯を立てていて離れない。

痛みにもがいている僕に、漂っていた眼球が触れた。

眼球は風船のように破裂し、僕の体に皮膚のような脈打つ膜が張り付いた。

噛みついた口は咬みちぎろうと力を強め、張り付いた膜は固まり、殻にのように固くなっていく。

このまま吞まれたら、自分が自分で無いモノに変えられてしまう。

逃げ場を求め、必死で辺りを見回す。

彼方に、輝くものがあつた。

それは見失っていた先輩だった。

人のような化物が舞い踊る灰色の世界で、一人戦っている。

踊る手を裂き、目を断ち、鼻を削ぎ、舌を蹴飛ばし、耳を刻み、脚を踏み潰す。

ただ歩み、進んでいるだけに見えるその所為。

その歩みは化物を寄せ付けない。

グロテスクな世界で、先輩は人として、輝いていた。
現実の世界と違う事無く、美しく在った。

先輩を目指し、駆ける。

体に化物が取り付いてきても、構わず走る。

食い込む歯も、張り付く眼球も、舐め溶かしてくる舌も、体を掴む手も、足をかけようとする
転がる足も構わず、走る——

辿り着いたその場所に、先輩は居た。

「誰だか知らないけれど、私を捕らえたのはあなたね」

知らないのも無理はない、遠くから見ていただけの僕を、先輩は知るはずが無い。

けれど——捕らえた？

先輩の動きが止まり、その体に化物が張り付き、膜で覆い尽くしていく。

「私から見れば、あなたも同じ影の化物なのよ」

悲しげな言葉——

「そして、私を捕らえた一匹。私も終わりね……」

化物に包まれていく先輩、その体は食いつく口に咬み契られ、舌は嘗め溶かされ、皮膚のような膜に包まれていく

人のような膜の中から、先輩の声だけが響いてくる。

「美しく在りたいと歩いてきたけれど、結局は呪いを引き寄せる、誘蛾灯にしかなれなかった」

先輩に食いついた口を、這い回る舌を、張り付いた皮膚を引き剥がす。

「戦え無くなれば、化物にとり憑かれ、中身を喰い尽くされ影になるだけ」

いくら剥がしても、化物は際限なく集まってきて、僕もろともに包み込んでくる。

「自分で在るために、望んだ皮を選ぶために、化物の中から美しい膜を選び着飾ってきた」

蠢く化物の中で、もがくようにかき分ける。

「けれど、所詮は化けの皮、嘘でしかない。こうして殻になり、溶かされるだけか……」

そんな諦めの言葉を否定するように、ひたすらにかき分ける。

体を蝕んでくる痛みを省みずに、ただひたすらに。

やがて、僕も膜に包まれ、既に殻の闇の中。

膜の中はドロドロと柔らかく、体を蝕み溶かしていく。

何処までが僕で、僕は何処なのか。

「私は、何だったのだろう」

先輩は……

闇の中で、僕は手を伸ばし、掴み、確信を以てたぐり寄せる。

闇の中に輝く手、握りしめたその手の先に居たのは先輩だった。

先輩の姿は、僕の見ていた憧れの先輩の姿そのものだった。

先輩は、自分の手足を見つめ、目を閉じ、自分の体を撫で、顔に触れ確かめる。

「これが、あなたにとっての私なのね……」

目を閉じたまま——

「これは、あなた望んだ姿でしかない、けれど」

眩く顔は、柔らかく——

「この体で、私は在りたい」
微笑んでいた。

先輩は握りしめた僕の手に手を重ね、見つめてくる——
「あなたも、私の望む姿で、居てくれる？」
僕はただ、その暖かな手に、手を重ねた。

喧噪が辺りを包む。
スクランブル交差点の青信号は点滅している。
人混みの中、僕らは手を繋いだまま、駆け出した。